

「道徳と宗教の関係」をモラロジーの原典と現代的諸問題から読み解く

モラロジー研究会(12月21日)開催報告

道徳科学研究所(以下、道科研)は、「道徳と宗教の関係を問うーモラロジーと宗教学からのアプローチ」をテーマに、対面式(公益財団法人モラロジー道徳教育財団 生涯学習センター [研修館 201 教室])と Zoom 併用の「モラロジー研究会」を開催しました。

(1)コーディネーターによる趣旨説明と問題提起

冒頭にあたり、竹中 信介 道科研研究員が、「趣旨説明」及び「問題提起」を行いました。趣旨説明では、①「道徳」と「宗教」はどう違うのか、重なるところがあるのかどうかを定義や事例を交えて考察する、②「モラロジーは宗教ではない」という言説の背後に潜む人々の意図や事情を検討し、道徳と宗教をめぐる問題の所在を明確化する、③宗教学や宗教社会学の知見を参照し、モラロジーにおける道徳と宗教の位置づけを探る、という3つのねらいを提示しました。

続く問題提起では、「なぜ道徳と宗教の関係を問う必要があるのか」という問いを提示するところから議論を始めました。まず、廣池千九郎(1866~1938)の『道徳科学の論文』からの引用をもとに、モラロジーにおける「道徳」と「宗教」の位置づけを検討し、「宗教」の潜在性・個人性、「道徳」の顕在性・普遍性を確認しました。しかし、現代的には、「宗教」の持つ社会性(社会的な機能・役割)を問う必要があると主張し、「科学」「暴力」「物語」「経済」「社会」「政治」「教育」などと「宗教」がいかに関係しあうのか、いくつかの事例と共に考察しました。これらの要素に、倫理・道徳が深く関わることから、「道徳と宗教の関係」を問う必要があるのではないか、という問題提起を行いました。

(2)基調報告

田島 忠篤 道科研客員教授は、「宗教とモラロジー(道徳科学・最高道徳)」と題し報告しました。同報告は、「宗教(religion)」とは何か、なぜモラロジーにおいて問うのか、という大枠の発題からはじまり、現代日本の宗教事情(民俗宗教/信仰の実践)、モラロジーと宗教の関係、モラロジアン以外に説明する際に重要になる論点が示されました。田島客員教授は最終的に、「モラロジーと宗教の関係」についての現時点でのまとめとして、「廣池千九郎法学博士が昭和3年に出版した『道徳科学の論文』において、モラロジーは最高道徳の実行を通して個人の品性完成と全世界の安心、平和、幸福の実現をめざすため一般的道徳には含まれない世俗を超える絶対的な観念や救済という宗教的要素あるいは宗教性が含まれている」と締めくくりました。

(3)コメント

冬月 律 道科研主任研究員は、「シンクレティズムの観点からみたモラロジーと宗教の関係」と題して、コメントしました。冬月主任研究員は、「シンクレティズム」を「互いに異なる二つ以上の宗教が相互に接触することによって生じる、一宗教内の変質の過程のこと」

と定義しました。そして、日本におけるシンクレティズムでは、聖徳太子の十七条憲法や空海の三教指帰などといった「神儒仏」の例が見られる一方、「仏教」と「神道」の結合が中心となることから、「神仏習合」が代表的であると述べました。他方で、日本人の宗教をシンクレティズムのみで分析・把握することは困難であること、シンクレティズムが情報の送り手と受け手の双方の側で生じる現象であることを指摘しました。最後に、モラロジーと宗教の関係(試論)について、「モラロジー(廣池説)」を主軸として「日本の伝統宗教」と「個人の宗教+マイモラロジー説」が歯車となって、有機的に連動する(モラロジーだけで完結しない)図式を提示しました。

(3)全体討論

フロアと Zoom の参加者を交えて、討論の時間を持ちました。神や伝統、祖先などの具体的な問題をどう考えるのかという課題や、「宗教」と「信仰」の違い、「因果律を信じること」と統計学(科学)との関係などに話題が及び、規定の時間を越えても議論が終わらず、今後へのさらなる展開が期待されるなかで、閉会となりました。

(文責：道科研研究員、モラロジー研究推進プロジェクト コーディネーター 竹中信介)